

要約版

伊藤比呂美における引用と越境の詩学

——交差する時間／変異する言葉

福尾晴香

二〇二一年度

本論文は、主に一九八〇年代以降の現代詩におけるインターテクスチュアリティとジャンル混交の問題、そこから浮かび上がる古典文学と現代文学の関係について、伊藤比呂美のテクストを手がかりとして具体的・実証的に明らかにすることを目的とする。

第1章では、伊藤比呂美の創作活動のなかでも比較的初期に発表された『テリトリイ論2』（一九八五年）において、引用の方法がどのように確立していったのかを、詩集全体のテーマに即して論じた。『テリトリイ論2』は「2」という巻数がつけられているものの、じつは『テリトリイ論1』（一九八七年）よりも先に刊行されている。具体的な理由は、明らかにされていないが、『テリトリイ論2』刊行前の一九八四年二月から、『テリトリイ論1』の元となった「テリトリイ論」の連載が始まっている。「テリトリイ論」というタイトルは、『テリトリイ論2』で過去に遡ってつけられており、連載の「テリトリイ論」を本家として、共通するテーマ性を有している詩篇を集めた詩集を『テリトリイ論2』としたものと思われる。『テリトリイ論2』の初版本をみると奥付には「テリトリイ論[※]」と、明確に「2」とつけることが留保されている。

伊藤比呂美は、第一詩集『草木の空』（一九八七年）収録の詩「節分の明くる日」に、わずかにルー・リードの言葉を引用しているが『テリトリイ論2』以前では、まだ一般的な引用の方法、つまり引用する言葉とされる言葉が明確に区切られるかたちでの引用となっている。こうした引用の方法がより自覚的に、過剰に用いられるのは『テリトリイ論2』以降である。

そこで、第1章ではまず伊藤の詩作のなかでひとつの転換点に位置付けられる『テリトリイ論2』のテーマと方法に関する具体的な分析を行った。これまでの研究では、妊娠・出産・中絶、家制度や血縁関係など女性に関する問題をテーマにした詩が主に論じられてきた。しかし、この詩集は、巻頭詩「アウシュビッツ ミーハー」以下、計八編のポーランドを舞台とした連作詩篇からはじまっている。

とくに詩「アウシュビッツ ミーハー」には、ホロコーストの記憶、引いては人間の死と殺害の記憶をいかに表現するかをめぐって、表現自体を問い返す根源的な問題が提起されていることから、この問題がどのように巻末の詩「カノコ殺し」までを通して連関しているのかを論じた。結論として、『テリトリイ論2』がホロコーストへの表現上の問いを入りに、日常のなかにある他者との葛藤や暴力性、身近な殺人、そして中絶、出産という人間の死と生をめぐるテーマを捉え返す試みとなっていたことを明らかにした。

第2章は、『テリトリイ論2』収録の詩「叫苦と魂消る」を分析対象とした。この詩は、曲亭馬琴の読本や江戸期の切腹、刑罰に関する解説本、妊娠・出産のマニュアル本など、ジャンルの異なる七つのテクストからの引用で構成され、とりわけその引用の方法に特徴がある。馬琴のテクストのなかでも女たちの腹裂き、切腹というグロテスクな場面を切り取り、異なる文脈にある解説本やマニュアル本の言葉と接続する。こうした引用と接続を通して、八〇年代当時に妊産婦が抱えた不安や孤独の「声」と複数の女たちの叫びとが重ね合わされている。他者によって書かれた言葉のなかに「声」と「身体」の痕跡を見出す伊藤の引用の詩学がジャンルを再考させる新たな表現の領域を開示していることを明らかにした。

第3章は、詩「叫苦と魂消る」以後、どのように引用の方法が深化していくのかを検討するため、『テリトリイ論2』の巻末に収録されている詩「カノコ殺し」を対象に据えた。「カノコ殺し」には中絶病院を取材したルポルタージュの一節が引用されている他、多くの他者の言葉が本文に流し込まれるように引かれている。これまでの引用が引用元と地の文の言葉を明確に切り分けることができているのに比して「カノコ殺し」では、自他の境界が曖昧になり、さらに「わたし」や「カノコ」という主体も分裂し、増殖していく。こうした「カノコ殺し」の方法論を、同じく子殺しについて扱った田中美津『いのちの女たちへー取り乱しウーマン・リブ論』の語りの方

法を補助線として、そのつながりと差異に注目し論じた。また両者の語りや表現は、優生保護法改正反対運動など、女性身体の家国家管理をめぐる同時代の文脈と密接に関わっており、こうした文脈に抗する重要な方法であったことを明らかにした。

第4章は、伊藤比呂美という詩人とメディア環境に着目し、ジャンルの異なる三人の表現者の共同制作による連載「テリトリー論」および単行本『テリトリー論1』について論じた。「テリトリー論」で伊藤は、初めて本格的に共同制作を行ったのだが、ここで伊藤は自身の詩が他者に壊される瞬間に立ち会うことになる。コピーライティングや広告の言葉がもてはやされていた八〇年代当時、伊藤、そして写真家の荒木経惟、構成者の菊地信義は、それぞれの表現と技術を闘わせることで、広告のような調和的でなめらかな表現を打ち破ろうとした。三者の格闘によって、最終的に生まれたのが詩の言葉が読めない詩集である。先行研究では、詩と写真の競合について主に論じられてきたことから、菊地も含めた三者の競合の具体的様相に関して、メディア状況や技術的背景から調査・分析を行った。「テリトリー論」における伊藤の嗜虐性は、以後、同じようなかたちでは發揮されないものの、操作主体としての自己、また既存の「文学」概念を徹底的に破壊したことで、従来の表現方法に収まりきらない新しいテキストの模索へとつながったと結論付けた。

『テリトリー論1』以降の約一〇年間で、伊藤は詩を忘れたかのように、子育てや家族をテーマとしたエッセイや小説の執筆にシフトする。一九八〇年代から『良いおっぱい悪いおっぱい』（一九八五年）で、妊娠・出産・育児エッセイという領域を開拓した伊藤は、同じく子育てを主題とした『おなか ほっぺ おしり』（一九八七年）や自身の家族関係について描いた『家族アートの』（一九九二年）などを発表し、『ラニーニャ』（一九九九年）で第二回野間文芸新人賞を受賞する。その後、伊藤が本格的に小説というジャンルに括られるテキストを書くことはないのだが、少なくとも詩に収まることで

きずに、さまざまなジャンルをさまよったといえるだろう。この九〇年代の数少ない詩作が『わたしはあんじゅひめ子である』（一九九三年）だ。ここでは、数編の詩に説経節の登場人物や物語が取り込まれている。説経節への関心が、エッセイや小説の執筆活動を経て、新しい表現として結実したのが『河原荒草』（二〇〇五年）だといえる。

第5章では、ジャンル越境の問題と関わり、説経節の語りをテキスト全体に取り込んだその『河原荒草』について論じた。新装版で「長編叙事詩」とも謳われた『河原荒草』は、詩と散文の境界に位置する。テキストに取り込まれている説経節は中世の〈語り物〉と呼ばれるジャンルであり、なかでも「道行」と呼ばれる特定の場面は、様々な地名を文中に読み込むことで土地の人々とその暮らしを読者に喚起させる役割をもつ。『河原荒草』では、物語全体が「旅」と「移動」に貫かれ、説経節と同じ語りの形式を取り込みながら現代の「道行」を描いている。さらに、「移動」をめぐって「移民」と「帰化」という言葉が、漢字表記の「移民」と「帰化」、カタカナ表記の「イミン」と「キカ」と区別して用いられていることに注目し、その差異を分析した。漢字表記の「移民」は国籍を変更しないまま行われる移住、「帰化」は国籍の変更という国家への帰属の関係を示すものといえる。一方で、カタカナ表記の「イミン」と「キカ」は漢字表記に含まれる帰属の複雑さをすりぬけ、「キカ植物」のあり方と重層的に語られることで従来の国家との帰属関係とは異なる新しい在住の仕方を示していることを明らかにした。

第6章は、『切腹考』（二〇一七年）を分析対象とした。テキストは、文字どおり切腹の話から始まるのだが、じつは内容の大部分は森鷗外論ともなっている。ただし、いわゆる文学者について論じた評論ではない。テキストには鷗外の歴史小説や翻訳が数多く引用され、そうした鷗外のテキストのあいだに、現実の出来事が次々に取り込まれていく。ISISによる日本人拘束事件、夫の介護、熊本

地震など、個々のエピソードは断片的で、脈絡なくみえる。しかし、そのようなノイズや破調は、それ自体、首尾一貫性を求める既存の文学的価値観、つまりカノンと呼ばれる文学が追い求めた形式を壊す試みでもある。書評などでは、鷗外への関心が好意とイコールで論じられてきた。しかし、『切腹考』で提起される鷗外の文体、「リズム」や「音」の問題に着目すると、必ずしも鷗外に対する好意のみが描かれているのではないことがわかる。こうした文体に関わる問題が、鷗外の複数性や女性性を引き出し、脱父権化する試みとなっていたこと、さらに、他者の言葉を次々に取り込む語りの方法が、書く行為と切腹と密接な関係であることを明らかにした。